

“ブンガワン・ソロ”の地再訪

利 光 正 文

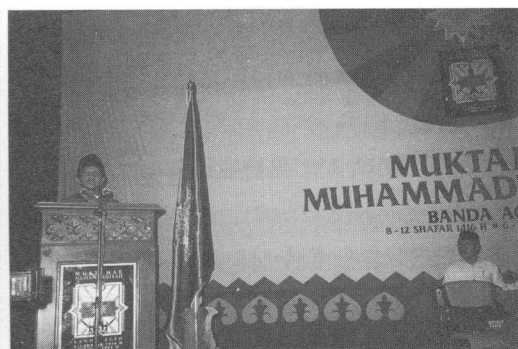
I. はじめに

昨年末、12月15日～28日までの2週間インドネシアを訪れた。科研費の支給を受け、広島大学教授植村泰夫氏と共に、ジャカルタ～バンドン～ジョクジャカルタ～スラカルタ(ソロ)～スラバヤ～バリと回り、それぞれの地にある大学を訪問して研究資料を収集するとともに各大学の研究者からレビューを受けた。既に、テレビや新聞で報道されている通り、インドネシアでは米ドルに対し通貨ルピアが下落し、経済は混乱していた。その最大の原因はスハルト大統領の問題で、アセアン会議を欠席して以後健康不安説が定着、政治不安が経済不安へとつながったわけである。3月に予定されている大統領選挙において、スハルト氏の7選が現実視されていたが、高齢(76歳)に加え、健康状態がすぐれないということで、5年の任期を全うできるかどうか疑問視され始めた。強力な軍部を足がかりとして、30年にわたり独裁政

治を行ってきたスハルト大統領に対し、7選批判を公然と口にする人物もでてきた。その代表がイスラム改革団体ムハマディヤの中央本部委員長アミン・ライス氏である。混迷を深めているインドネシアの政治・経済情勢を肌で感じながら、駆け足で回った2週間であった。小稿では、1985年ムハマディヤ全国大会出席のために訪れ、12年ぶりに再訪したスラカルタ市について報告したい。この市はアミン・ライス氏の出身地でもある。

II. スラカルタ(ソロ)市の概略

“ブンガワン・ソロ”の歌で有名なソロ川の中流トリニールでは、人類の祖先ジャワ原人の骨が発見されている。ソロ川の上流に位置する人口約50万のスラカルタ市は、中部ジャワの古い都である。16世紀の後半、中部ジャワに成立したイスラム王朝マタラムは、ジョクジャカルタ南郊のコタグデに都し、17世紀前半に



アチャのムハマディヤ大会で演説する
アミン・ライス委員長(1995年)



スラカルタの王宮(クラトン)



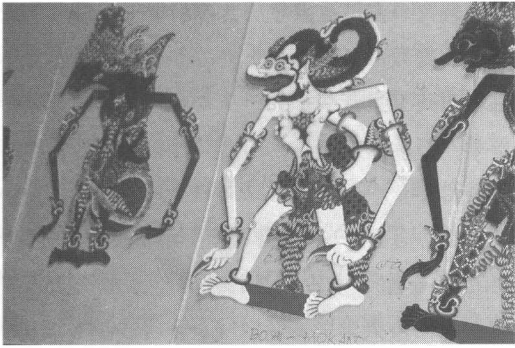
パティックの工場

在位した第3代スルタン・アグンの時代に最盛期を迎え、中・東部ジャワに覇を唱えた。しかし、第4代以降は内紛が続き、バタヴィアを根拠地とするオランダ東インド会社の力を借りて以後はその介入を招き、次第に衰退して行った。1755年、打ち続く王位継承戦争により王家の統一は破綻し、スラカルタのススフナン家とジョクジャカルタのスルタン家に二分された。その後、ススフナン家からマクヌガラ家が、スルタン家からパク・アラム家がそれぞれ分家してマタラム王家は四分された。こうして、スラカルタはジョクジャカルタと並び、ジャワの宮廷文化を保持する都市となったわけである。

さて、スラカルタを代表するものと言えば、パティックとワヤンであろう。パティックは木綿あるいは麻の布地に蠟けつ染めで装飾したもので、「ジャワ更紗」とも呼ばれている。布地に蠟を置いて模様を付けてゆき色鮮やかな染料で染め上げるこの技法は、宮廷女性の特技として受け継がれてきたが、19世紀にパティック産業として発展した。20世紀の初頭、唯一の民族産業であったパティック業に華僑資本が参入してきたため、危機感を募らせたスラカルタのパティック商人達は結束し、イスラム商業同盟を結成した。この組織はほどなくイスラム同盟と改称され、またたく間にインドネシア全域に支部を拡大、一大勢力となってインドネシア

の民族主義運動をリードして行った。勿論、イスラム同盟となってからその中心はスラカルタを離れたが、民族主義運動の一拠点としての役割を長く果たし続けた。それはともかくとして、今回、数あるパティックの店の中でもインドネシア最大と言われている「パティック・クリス」の工場を見学した。工場は、女性が巧みな手先の技術により繊細な図柄を描いてゆくか、一定の幾何学文様を男性がプリントしてゆく蠟けつ柄付けの棟、染料の染め付けと蠟を除く作業の棟、染色された布を乾燥させる棟、の3つに分かれていた。特に、蠟けつ柄付けの棟では男女100名以上の職人が40度はを超えていると思われる蒸し暑い室内で、時におしゃべりをしたり、水分を補給しながら仕事をしていた。

パティックと並び、ワヤンもスラカルタが本場である。日本におけるワヤン研究の第一人者松本亮氏によると、ワヤンとはジャワ宮廷より発した伝統演劇の総称で、本来「影」を意味するが、この影は光により投射される影ではなく、人間の心に兆す葛藤、喜怒哀楽のひだに宿る影を指す、と言う。人形を用い、白い幕に影を映す影絵芝居ワヤン・クリと俳優の演ずる芝居ワヤン・オランがその代表である。ワヤンで演じられる題材はインドの古代叙事詩『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』から取られており、上演時間は夕方から夜明けまでに及ぶ。ワヤン・オラン専用の劇場があり、毎夜8時から上演していると聞いたので、見に出かけた。1・2階併せて400人くらい入ると思われる大きな劇場であったが、見物客は我々も含めて20人くらいの外国人ばかり。演じる人に申し訳ない感じがしたが、なかなかの熟演で舞台は盛り上がった。舞台前面の下段には、青銅のドラや太鼓弦楽器を組み合わせた伝統的なガムランを演奏する楽団員が20名近くいた。ガムランの



ワヤンの人形

音楽に合わせて、舞台の幕が開く。父王により国を追放されたラーマ王子は妻とともに森を放浪中、妻を暴虐を極める悪魔の王ラワナに略奪される。猿軍の助けを得て悪魔王の国に攻め入り、妻を奪回した後故郷の国に戻り王位に就く、と言う物語である。けだるいようなガムラン音楽の音色をバックに、きらびやかなジャワの伝統的衣装を着けた俳優達が約2時間にわたり熱演を繰り広げた。

Ⅲ. スラカルタのムハマディヤ運動

1985年12月7日～11日、スラカルタにおいて第41回ムハマディヤ全国大会が開催された。文部省科学研究費による第4回学術調査でモルッカ（香料）諸島のアンボンに居た筆者は、大会の前日飛行機を乗り継ぎ夜中にスラカルタ入りし、夜半に参加手続きを済ませ、翌日の開会式に出席した。大会の期間中、インドネシア全域から5千人以上のムハマディヤ幹部が参加したため、スラカルタはムハマディヤの町と化していた。大会が開かれる数年前より、スハルト大統領はあらゆる政治・社会団体に対し、インドネシアの建国五原則パンチャ・シラ（唯一神への信仰、人道主義、社会正義、民主主義、インドネシアの統一）を結党の唯一の根本原則とすることを強く要望してきた。イスラム政党の開発統一党や伝統派イスラムの団体ナフダト

ウル・ウラマは、既にパンチャ・シラを受け入れていた。様々な葛藤を経て、ムハマディヤもその受け入れをスラカルタ大会で決定した。1912年の創立以来、ムハマディヤのアサストゥンガル（根本原則）がイスラムであることは、言わば、自明の理であっただけに、この決定は苦渋に満ちたものであった。現委員長アミン・ライス氏のスハルト批判は、こうした出来事の延長線上にあるものと推測される。あれから、12年の歳月が流れた。スラカルタ大会を主宰した当時の中央本部委員長A.R.ファフルディン氏も既にこの世にはなく、ムハマディヤ中央本部の幹部達も大幅に若返っている。

所で、スラカルタのムハマディヤの歴史は、20世紀前半に遡る。スラカルタにムハマディヤの支部が設立されるのは、1922年のことである。設立時の会員数は男女196名であった。前述のように、イスラム同盟が存在し、インドネシア共産党も支持を獲得しつつあり、スラカルタは政治運動の盛んな土地になっていた。そのような中であって、ムハマディヤは純粋な宗教団体として、独自の活動を展開して行った。スラカルタの初期ムハマディヤ運動を代表するリーダーはムルヤディ・ジョヨマルトノで、彼は1923年に支部委員となり、すぐに頭角を表わした。1927年、ジョヨマルトノはスラカルタ地域を統括するムハマディヤ・コンスル（全権代理）に就任、以後、20年にわたりその地位にあった。この間、彼は多種類のムハマディヤ学校を創立するとともに、診療所・病院あるいは孤児院等の社会福祉施設を運営し、ムハマディヤ運動の基礎を確立した。12年前、ムハマディヤ高等学校と産婦人科病院及び孤児院を見学した。高等学校は週2時間をイスラムの授業にあてている以外、公立のそれと大差なかった。病院もなかなか立派であり、孤児院の施設

も整っていてそこから子供達が学校に通っていた。スラカルタのムハマディヤ運動はジョクジャカルタのそれと比較すると若干見劣りがするけれども、着実な歩みをしていることが感じられた。

IV. スラカルタの大学

スラカルタでは2つの大学を訪れた。まず、ムハマディヤ大学について。ムハマディヤは現在全国に27の大学を擁しているが、中でも、スラカルタの大学は歴史が古い。1958年、ジャカルタ・ムハマディヤ教育大学の分校として建てられたのが、その前身である。1965年にはスラカルタ・ムハマディヤ教育大学として独立、次いで1981年、5つの学部を持つ総合大学として生まれ変わった。教育学部・法学部・経済学部・工学部・宗教（イスラム）学部がそれぞれである。1983～84年にかけて心理学部と地理学部が増設され、1995年には保健学部が加わり、イスラム研究の大学院も新設され今日に至っている。現在の学生数は15,275人で、堂々たる大学である。創立時にムハマディヤが掲げた教育理念は、イスラム教育と欧米式の普通教育を合体させると言うもので、イスラム教育しか行わない伝統的なプサントレン（イスラム塾）を批判して立案された。ムハマディヤは

普通教育の方に重点を置き、小学校から大学までの一貫教育を目指した。こうした教育理念が都市の商工業者やインテリ・ムスリムの支持を得て、都市部を中心として勢力を拡大してきたと言えよう。

次に、3月11日大学(Universitas Sebelas Maret)を紹介する。これはスラカルタにある国立の総合大学である。インドネシアには29の国立総合大学があるが、地名や歴史上の人物の名前を冠したものが殆どであり、月日を大学名としているのは大変珍しい。この名前の由来から話さなければならない。

1965年9月30日、初代スカルノ大統領の親衛隊長ウントン中佐をリーダーとするクーデターが起きた。所謂、9・30事件である。既に、軍部と共産党との緊張関係は一触即発の状態となっていたが、この事件をきっかけとして軍部による共産党壊滅作戦が展開された。この時、いち早くクーデターを鎮圧したのは、当時首都防衛司令官の地位にあったスハルト少将であった。その後、大統領スカルノの権威は失墜、軍部を掌握したスハルトの権限が増大した。そして、翌1966年の3月11日、スカルノは全権限をスハルト陸相に委譲、スハルトによるオルデ・バル（新秩序）体制がスタートした。このことを記念して、3月11日大学が創立され



ムハマディヤ大学の構内



3月11日大学の正門

た訳である。植村氏と筆者は3月11日大学の文学部を訪ねた。と言うのは、広島大学文学部東洋史学科大学院博士課程に在学中の赤瀬雄一さんが丁度留学中であつたからである。赤瀬さんは植村氏が指導教官で、イスラム同盟の研究をするために約2年の予定で留学していた。赤瀬さんの案内で文学部のワルト助教授にお会いし、文学部の概要について説明を聞いた。ワルト氏はインドネシアの経済史が専門で、ジャワ糖業史を研究テーマとしている植村氏と熱心に意見交換していた。3月11日大学はキャンパスが大変広く、学内に緑が多いのが印象的であつた。

V. おわりに

最近の新聞報道によると、経済不安からインドネシアのいくつかの地域で暴動が起きているとのことである。スハルト現大統領の7選はほぼ揺るがないであろうけれども、故スカルノ大統領の長女メガワティさんも大統領選挙に、既に、名乗りを上げている。3月に行われるインドネシアの大統領選挙は、史上空前のホットなものとなろう。大統領選挙が終了するまで、インドネシアの情勢には目が離せない。ともあれ、12年ぶりに訪れたスラカルタの町の喧噪と身を焦がすような暑さを思い出しつつ、この報告を終えることとする。